



むねにひびく鐘

エプロン通信員 末吉郁子

6月23日を慰霊の日と呼ぶ。息子が6歳の時、彼が通う学童で平和学習として佐喜真美術館を訪れたことがあった。

12時のサイレンが鳴った時は車で移動中だったため、家に着いてから黙祷しよう、ということになった。その日息子がノートに書いたもの。

「せんそう もうやらないでください さきまびじゅつかんに いって せんそうの えと おばあちゃんとおじいちゃんが けがしたしやしん こわかった ほらあなにとびこんだり はしってにげたりしたんだね ほんとにおに おきなわに あったんだね」

私は息子の歌う「HEIWA（平和）の鐘」に癒される。私たちの島に存在する軍事施設はいま現在も機能している。よその国ではいまだに惨劇が起きている。

辛い現実を抱きながらやってこれたのは沖繩人の気質でこそだからではないか。耐え切れない痛みを体験した人たちの思いを怒りとしてではない形で継いでいこう。いつも「戦争はまちがい！」と言える私でいよう。

そして小さなひとりである私たちにまですることができるのは自分の世界での争いを起こさないことかな。

6月23日は友人の誕生日でもある。彼の母は沖繩人、そして父は元米軍人だ。

HEIWAの鐘

歌詞（抜粋） 仲里幸広

武器を持たぬことを伝えた
先人たちの声を永遠に語り継ぐのさ
脅かすことでしか守ることができないと
くり返す罪（戦争）
忘れゆく愚かな力（権力）
僕らの生まれたこの星に
奇跡を起こしてみないか
こがしを広げてつなぎゆく心は
ひとつになれるさ

振り向かず笑い続けた
誇る島の魂を永遠に守り抜くのさ
銃声が鳴り響き 海や大地が砕け散る
正義の叫びこだまする
フェンスを飛び越えて
君が一人たてばかわるのさ
明日へ輝いて
ずっと未来の夢をここに残してゆこう
平和の鐘は君の胸に響くよ



伊佐浜「新造佐阿天橋碑」

74



伊佐市営住宅の片隅には、宜野湾市指定史跡の石碑があります。表裏に碑文があり、石碑表の大意は「東側に首里・那覇に行く正路があるが道が険しくて容易でない。皆その道は通らず、平坦なこの道を通る。しかしながら、平日は川を歩いて渡っても、大雨の時は氾濫して渡れないので、1820（嘉慶25）年ここに橋を建設した。」ということとあります。当時の道の状況と、今昔の人もやはり難儀な道は通りたくないのだとわかります。昔は徒歩であったのですから尚更です。石碑裏は橋の建設に尽力した人々を称えた内容になっています。碑文にてくる川と

らんと読める状況ではありませんでしたが、2000（平成12）年に復元整備が行われ、関係者の尽力により往時の碑文の姿を取り戻して、現在に至っています。

写真①は復元前の石碑を写したものです。復元前の石碑と護岸、それと砂浜が見えます。伊佐の浜辺は粗蹄「姉妹敵討」、民謡「十七八節」にも登場し、遠浅の美しい砂浜であったとされています。浜は現在埋め立てられ、市営住宅が連なっていますが、石碑と護岸は今も残っています。石碑の建立された土台の石灰岩の周辺にも当時から砂が若干残っており、また、いくつかの力二穴もあり、運がよければ力二が見られ、美しい砂浜があったことを思い浮かべる事ができます。



▲写真①「新造佐阿天橋碑」復元前



▲写真② 復元後 1989(平成元)年指定

「宜野湾市史」へのお問い合わせ
教育委員会 文化課 ☎899314430